

間苧谷榮先生を送る言葉

学長 小 川 春 男

国際関係学部の前身、経済学部国際関係学科は昭和51年（1976年）に設置された。間苧谷先生はその新設学科の専任教員となるべく、設置半年前の昭和50年9月に本学にご着任された。すでに東京外国語大学や国立インドネシア大学で教鞭を執った経歴をお持ちで、新進気鋭の若手インドネシア研究者としての地位を獲得していた。私は昭和51年4月の新学科設置時に専任教員として採用されたので、間苧谷先生は、本学へのご着任こそ私に先んずること半年に過ぎなかったが、研究者としては大先輩である。

私が間苧谷先生に初めてお会いしたのは、亜細亜大学への赴任直後だった。一橋大学での間苧谷先生の恩師は板垣與一先生であり、板垣先生のお弟子さんであった柴田裕二先生が私の恩師であったので間苧谷先生とは、師弟関係で言えば、謂わば叔父にあたる。板垣先生はインドネシアをはじめアジアの開発途上国研究の第一人者であり、間苧谷先生もそのご指導のもとにインドネシア研究をされていた。対する私は柴田先生と同様、理論的な国際経済学を研究していた。そんなわけで、叔父甥の師弟関係とはいえ、間苧谷先生が口にするのはC. ギアツやH. ミント、あるいはエスノセントリズムやカルチャー・ショック、私はJ. ミードやR. マンデル、あるいは為替相場や国際収支均衡などであり、研究領域はかなり離れていた。もっとも、間苧谷先生と接することで、私の視野は大きく広がったのだが。

当時は大学の新学部・新学科設置審査はかなり厳しかったが、ある意味では本学にとって幸いしたのかもしれない。設置が認可されるためには大物研究者を中核としてしかるべき教授陣をとり揃えなければならず、本学は東京の近郊という比較的立地条件の良い所に位置していたので、大学院の設置、あるいは学部や学科の設置ごとに、その中核として超一流の先生方をお招き

することができた。我らが国際関係学科でも板垣與一先生をはじめとする当代一級の研究者、ならびに、その先生方と関係する若手教員が集まっていた。板垣先生は、その卓爾たる研究活動業績で著名であったが、学問・研究領域のみならずすべてにおいて当たり前のように一流を身に纏うという趣きの人であったし、実際、周りには多くの一級の研究者が集まっていた。その板垣先生がご自分の専門領域で信頼し任せられる人物として招聘された方が間苧谷先生であった。一橋大学時代に間苧谷先生がどのような経緯でインドネシアに関心をもたれたのか、あるいは板垣先生に師事することになったのか伺っていないが、一橋大学がインドネシア研究のメッカであり、インドネシアというメジャーな地域研究領域に挑戦し、結果的に板垣先生の研究と人間性に惹かれたからこそ、その後一貫して板垣先生に師事されたであろうことは容易に拝察できる。

本学での設置に先行する国際関係教育は津田塾大学など若干しかなかった。国際関係教育には、言語系に重点を置くものや政治系に重点を置くものなど、いろいろな類型があり得る。その中で、設置時点で、経済学部を学科として、経済学に重点を置きつつ政治・経済・社会・文化を総合的に教育しようとしたのは本学の国際関係学科しかなかったように記憶している。そもそも、国際関係を冠する学部や学科は、五指に満たなかったとも記憶している。それだけ日本では先駆的でチャレンジングなものだったが、同時に、本学の国際関係教育が正統派であるという自負はあった。タルコット・パーソンのAGIL図式を各学問領域になぞらえ、それらの社会科学総合を目指した教育体系となっていた。このような性格の国際関係教育にもっともマッチしたのは地域研究そして開発論の視点やアプローチであったように思う。逆に言えば、地域研究を想定したからこそ、このような性格の国際関係カリキュラム体系だったとも言える。いずれにせよ、本学の国際関係学は地域研究とは切っても切れない関係だったし、多分、地域研究という分野からすれば正当・正論であったように思う。そんなわけで、板垣先生、そして間苧谷先生は学科の中核であった。

地域研究は、政治、経済、社会、文化の総合による研究が正当なアプローチとすれば、これを教育という側面でみても社会科学の総合が必要なわけでは、総合的な学習を必要とした。これにはかなりの知識や分析技法のストックと効率的な教育や学習を必要とし、良質な資料蒐集のノウハウ、そしてインデックスや図書の充実が必要となる。教師の知識の相当量を速やかかつ効率的に学生に伝授する必要がある、そのひとつのあり方がゼミ教育の重視ということになり、四年一貫ゼミ教育ということになる。つまり、四年一貫少人数ゼミ教育というのは、当初より、本学のような地域研究を中心とする国際関係教育ではひとつの帰結であったのかもしれない。

間苧谷先生は、ご専門や研究領域からしても、先生ご自身の性格や志向からしても、学生に対する教育に非常に熱心であり、かつ、その授業は各種の工夫を凝らし充実したものであった。また、間苧谷先生は学科きっての文具好きでもあった。よく、「おい、こんな便利なものを手に入れたぞ」と自慢げに語っていた。極めつきは、パソコンである。これが出現すると使い方や修理を安川一講師（当時、現一橋大学教授）や豊田由貴夫講師（当時、現立教大学観光学部長）など、周りの教員に聞きまくっていたものだった。幸い、研究室が二階上の木村秀雄助教授（当時、現東京大学教授）や私の被害は軽微だったが、私を除く以上の三名が本学を出奔したのもそれが理由かもしれない（呵呵）。中には、疑問符が付くようなうさん臭いきわ物の文具もあったが、この新しい文具の新発見に対する子供のような新鮮な驚きは、研究者としての飽くなき探求と同じ源泉であろう。それがあ限り、若々しい精神と情熱が保持できたのであろう。間苧谷先生がどの専門領域を選択したにせよ、教育に対して燃えるような情熱を傾けた筈だ。いずれにせよ、その結果として、間苧谷ゼミ生あるいは出身者は成績優秀者が多く、毎年の最優秀者の多くが間苧谷ゼミ生であった。

間苧谷先生のその情熱に加え、研究手法や研究姿勢は学生にとって良き見本でもあった。やはり学生は師の背中を見て育つものだ。間苧谷先生の、真摯に課題に取り組み、正確を期す、科学的な原典主義あるいは資料典拠主義

とでも言えばよいのか、その姿勢は、我々、学科内の若手教員にとって良い手本となった。私の例で恐縮だが、日本国際経済学会の本部事務担当理事になったとき、学会の各種の連絡や素案を作成したのだが、当然、会員は理屈っぽい研究者集団であるから厳密性はこの上ない。正確を期すために一字一句違わない正確に記された資料をもとに議論をしなければならないのだが、典拠主義のようなものがかなり役立った。このように、間苧谷先生の貢献の一つは若手教員への教育であろう。もちろん、直接若手教員を教育・研修したということではない。確認の意味で言うが、30年程前には、FD（ファカルティ・ディベロップメント）活動とか、若手研究者への研修とか、初年次教育などという発想や言葉が無かった。若手教員が自分たちでゼミの運営とか授業について関心を持ち改善を図るという雰囲気を作った、あるいは学部・学科運営を自分たちの責任として捉えたということだと思う。また、彼が関わった採用人事、すなわち、私より後に採用された教員のことであるが、全て成功している。採用教員の元来の資質に加え、採用後に若手教員を育てる雰囲気が、学部・学科を任せられる教員に育て上げたということである。

研究と教育以外に、あるいは研究・教育そのものなのかもしれないが、国際関係学科の運営にも非常に精力的であった。さらに言えば、国際関係学科そのものの性格や運営方式を実質的に固めたのは間苧谷先生とも言える。カリキュラム体系は勿論のことであるが、とくにゼミを重要視していた。「オリエンテーション・ゼミ」、「基礎ゼミ」、「専門ゼミ」、「総合ゼミ」という名称と位置づけに整理したのも間苧谷先生である。当時はこの大学でも専門と教養に二分されていて、四年一貫ゼミを進めるのが非常に困難な状況にあったので、2, 3, 4年次のゼミをカリキュラムの中心に据えて、その相互間の役割、講義科目との関係、教育目標などを明確にした。今では四年一貫少人数ゼミ教育などがどこの大学でも普通に言われているが、基本的にその方向を強力に推進した。例えばゼミだけを見ても、学生皆ゼミ履修制、学年別ゼミごとのゼミ運営委員会によるゼミ横断的な共通の指導方針と質保証、

卒論の義務化など、現今の単位の実質化要請に適うものを設置時点で整えていた。また、地域研究と地域言語の連繫なども進め、かなり熟慮され先駆的なカリキュラムを開発したのも間苧谷先生である。

今では、全国に国際関係領域の学部・学科は無数にある。しかし、国際関係教育を開発してきたという自負と、老舗としての誇りを間苧谷先生はお持ちであろうし、我々もそれを自覚すべきである。しかし、近年、日本の国際化が着実に進展しているのにも拘わらず、学生は内向き志向である。バブル崩壊後、ほぼ一貫して国際関係学部は逆境にある。新たな時代の国際関係教育を構築するのは、間苧谷先生に続く我々の責務でもある。

学科設置時点からの現役は私だけになってしまう。私は琵琶法師か千夜一夜の語り部でしかないが、そこに一番長く登場する主役は間違いなく間苧谷榮教授である。間苧谷先生は国際関係学科・国際関係学部はその研究・教育人生の全てを捧げたと言ってよい。本学での34年間にわたるその物語は間もなく終わるが、亜細亜大学を去られた後のご活躍を後日譚として語らせてもらうことをお願いして、とりあえず送る言葉としたい。